

メタモルフォーゼ

しじまに耳をすます

我が身は
絶え間なく降る宇宙線の
旋律を掻き鳴らす 剥き出しの
共鳴体となる



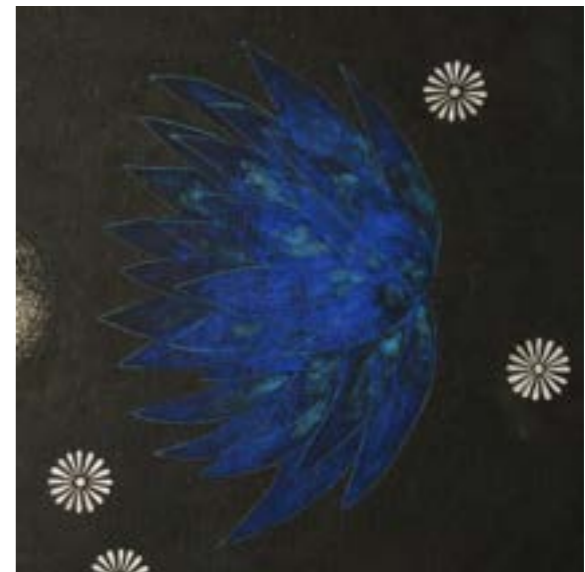
8



5



7



6

5 - 瑠璃まほろば 2019
6 - 瑠璃まほろば (部分)
7 - 瑠璃まほろば (部分)

あなたがあまりにも

あなたがあまりにも

私を正確にこじ開けるので

これまでと違った開き方をしてしまいました

あなたがあまりにも

私を自由に解き放つので

まわりにめぐらせてきた囲いを見失いました

あなたがあまりにも

私を鋭く見つめるので

私も私を見つめざるを得ませんでした

そのとき気がついたので

私が泡立つ無重力の空間にひとり浮かび

未来の軌道は書き割りできています

空気があまりにも

私を柔らかく押し包んだので

私は安堵して眠るしかなかったのです

眠りがあまりにも

美しい光を連れてくるので

私は泡立つ波とともに弾けるしかなかったのです





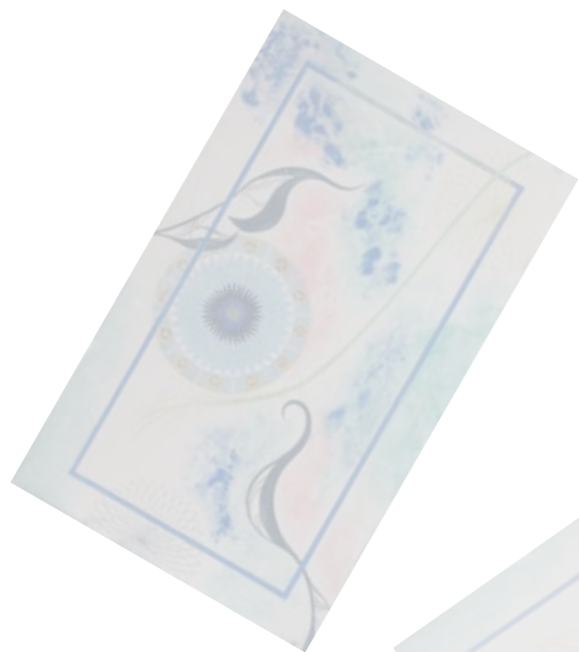
28

ことほぎのうた

遥かなる光のみなもとから
 妙なる調べをまとい
 ひとの子は送り出される
 その身にちいさな ともし火を宿して
 果てのない いのちの悦びに
 こころの青を育んで
 愁いと飾りをすすいだなら
 その身かがやいて 道しるべとなれ
 世界からやさしさを受けとるため
 世界をあたたかさで充たすため
 あなたは 生まれてきた



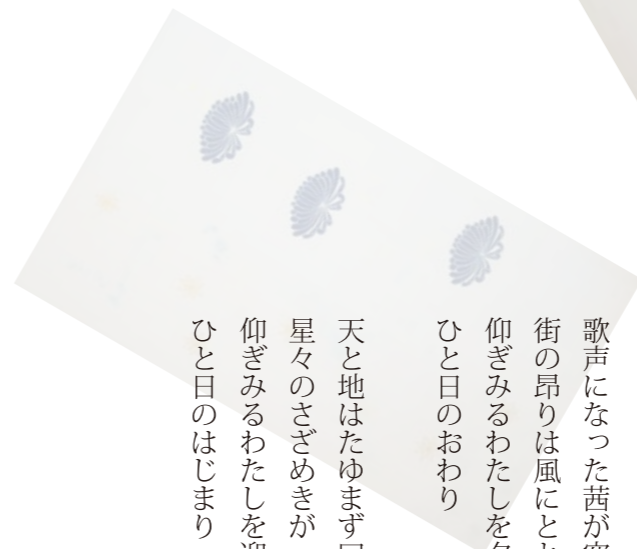
58



大きく深く息をすること
 今この瞬間を生きること
 わたしたちに許されているのは
 本当は たったそれだけ
 わたしが夢を閉じるとき
 夢がわたしを折り畳むとき
 眼裏に寄せる波音と
 交わした言葉だけを
 わたしは纏っていくだろう
 道を照らしてふるさとへ招く
 あの歌声に導かれて

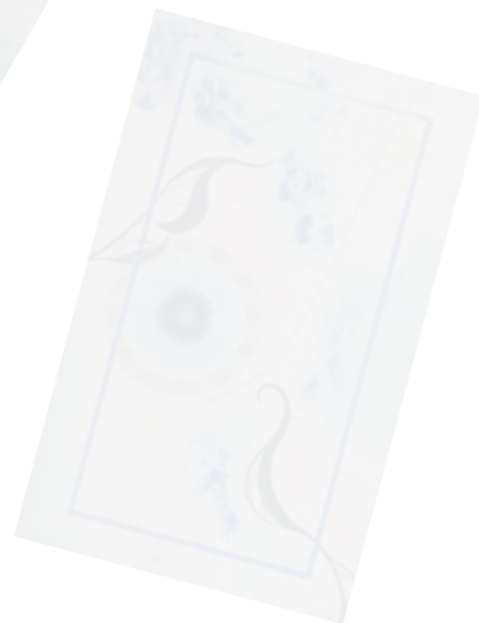
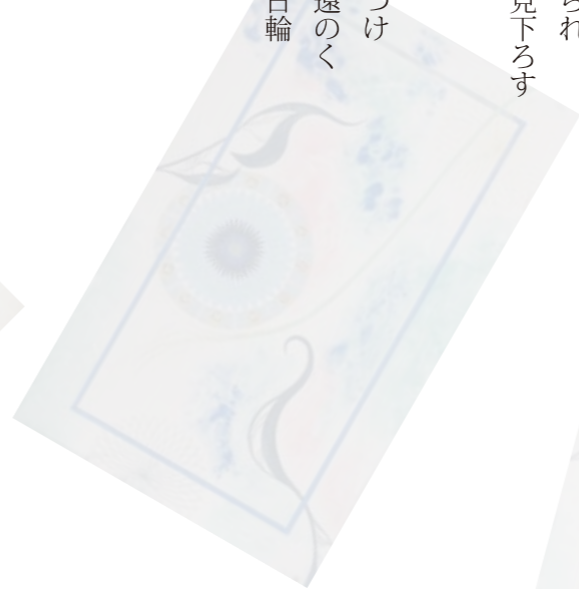


57



歌声になった茜が空にひろがる
 街の昂りは風にととのえられ
 仰ぎみるわたしを夕陽が見下ろす
 ひと日のおわり
 わたしが夢を閉じるとき
 天と地はたゆまず回りつづけ
 星々のさざめきが また遠のく
 仰ぎみるわたしを迎える日輪
 ひと日のはじまり

わたしが夢を閉じるとき





62



61

ここにいないきみへ

時をわたる鳥は羽をたたみ
ものがたりは閉ざされた
木漏れ日は凍てついている
透き通るからだか ぼくをすり抜け
きみは いつまでも咲く花になった

ぼくは支えをなくした気弱な木

月明かりに立ちすくむ

いなくなつてから きみは

前よりも饒舌になった

ぼくを 問いに向き合わせるために

ひとは 答えを置き去りにして生まれ

辿りながら帰っていく

永遠は一瞬の中にこそ宿るだろう

ぼくは きみのいのちを生きていく

もしきみが ぼくを見失つたなら

この大地で きみの形した星を捜せばいい